



“死”に戸惑う医学生（2）

医療法人パリアン理事長 川越 厚

患者宅は、とあるマンションの4階部分にあり、玄関の扉は半開き状態だった。来訪を告げると、待っていたかのように中からお母さんが顔を出した。後についてきた女の子は患者さんの孫で、先ほどの電話の様子とはまるで異なり、泣き叫ぶようなことはなく、「お母さん死んだの。お母さん死んだの」という言葉を繰り返しながら、玄関と母親の

居室との間をせわしく行き来していた。

部屋までの通路にはおもちゃや本（主に夫の専門書）がうず高く積まれており、狭くなった通路をすり抜けるようにして、僕たちは彼女の部屋に入った。無言で僕の後についてきた二人の学生は、部屋の奥におかれたベッドを遠巻きにするかのように、二間続きの部屋の入り口のところに立っていた。

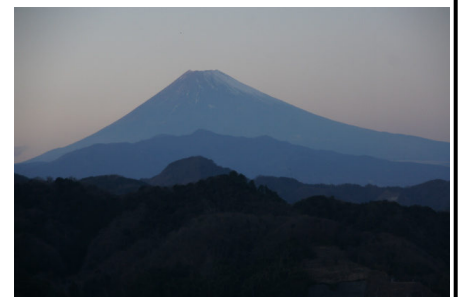
「大変でしたね。でも顔は大変穏やか。それよりも、こんなにきれいな方だったのですね。」率直な感想を僕は述べた。本当にきれいな死に顔であった。

死亡診断が終了すると、後を看護師の本田さんに託し、二人の学生と共に帰路についた。彼らは黙し、硬い表情を崩さなかった。

二日後の金曜日の夕方、2つのグループに分かれた学生が、実習で学んだことをスタッフの前で発表した。死亡診断に連れて行った学生たちの感想は、「自分があの場合にいてよいのか、戸惑った」ということであり、「患者の了解は取ってあるのか、もし自分が患者であれば見ず知らずの学生がその場に入ってくるようなことがあれば、嫌だ」という意見だった。この言葉の意味は、患者の同意を得ないまま医学生が死亡診断の場に居合わせる事が倫理上許されるのか、ということであるが、もう一つの意味が込められていたと僕は考えている。

この患者さんは別のグループが実習中の担当として既に関わっており、その学生たちが死亡診断に同行するのが筋ではないか、ということである。この点を彼らは口にこそしなかったが、僕には彼らのその気持ちがよくわかっていた。ではなぜ受け持ちでもない医学生を死亡診断に連れて行ったのか、という問題が生ずる。僕はいろいろな状況を踏まえ、医学生に「ひとは死ぬ存在なのだ」ということを実感してもらいたいために、彼らが考えたであろう“筋”をあえて外し、今まで顔を出したことはないが、死亡診断の同行を経験していない学生を連れて行ったのであった。しかしこの点は、今まづかったな、と反省している。

議論はこの点に触れないまま、「あなた方は医師の卵で、一般の人が立ち会うというのとは意味が違う」という看護部長の指
(2ページに続く)





(1ページから)

摘と、「いや、僕が患者だったら嫌だ」という医学生の激しいやり取りに終始した。確かなことは、二人の医学生は実際に立ち会った“患者の死に戸惑っていたこと”であった。初めての経験だからである。 (次号に続く)

パリアンスタッフの雑誌への発表状況

パリアンのスタッフは日夜、ケアに力を注いでいるが、忙しい業務の合間を縫って多くの雑誌に活動状況等を発表している。平成25年のこれまでに発表された論文・記事を紹介する。

- 特集：地域における緩和ケア（在宅緩和ケア）“家で死ねる街づくり”をめざして
-在宅ホスピスの現状と課題 保健の科学4月号 杏林書院
「(1) 在宅ホスピス・パリアンの働き」(川越 厚)
「(2) 在宅緩和ケアと訪問看護」(川越博美)
- 「最期の日々を生きるがん患者を支える～訪問看護の現場から～」 がん看護 南江堂
◇1・2月号-「病院から在宅をつなぐ」(川越博美)
◇3・4月号-「患者さんの希望が叶えられるために～病院と在宅の役割～」(佐藤博子)
◇5・6月号-「精神疾患を抱える家族が看取る」(焼野ノリ子)
◇7・8月号-「末期がん患者の施設での看取り～訪問看護と往診を導入して」(渡邊美也子)
◇9・10月号-「悪性リンパ腫の患者との出会いを通して実感した在宅の力」(飛延愛子)
- 特集：「緩和ケア訪問看護師」の”実践力”を育てる」 訪問看護と介護7月号 医学書院
『「緩和ケア訪問看護師」の”実践力”とは その育成に向けて』(川越博美)
『今を逃さない「アセスメント力」と「チーム力」で速やかな対応』(高橋寿美代)
『「緩和ケア訪問看護師教育プログラム」とは その開発と特徴』(渡邊美也子 他)
『多職種座談会 患者・家族の”潜在力を引き出す「在宅緩和ケアチーム」とは』(川越 厚 他)
- 「在宅ホスピスケアにおける統合失調症を有する家族への支援」(廣岡佳代、渡邊美也子、川越 厚)
癌と化学療法8月号 癌と化学療法社
- 『「リビングニーズ特約」利用から見たがんの諸制度の活用—特に在宅緩和ケアに関して—』
(賢見卓也) 緩和ケア9月号 青海社
- 【新連載】訪問看護師ががん患者になって考えた「死にゆく人に寄り添い支えること」
『No. 1 人生の危機は突然に』(川越博美) コミュニティケア9月号 日本看護協会出版会

～遺された本～

訪問ボランティア

あんなことこんなこと

「元気な時は一人でお店を切り盛りして、大好きなおしゃれも、趣味もたっぷり楽しみながら暮らしてきたというCさん。でも今は、病状が進み寝たきりの状態になっていた。

身内とは長く連絡が途絶えており、全く一人での在宅療養である。でもそんな辛いことは全く表に現さず、明るくふるまっていた。

そのCさんが、亡くなられた。私も機会がありお別れに伺うことができた時のこと。一冊の本がテーブルに残されていた。その中に次のような文章に印がしてあった。「人は一人で生まれ、一人で死んでゆく。恋人がいても家族に囲まれていてもしよせん孤独。(中略) 孤独と向かい合い、飼いならし、新しい自分と出会える人だけが人生に輝く道を発見する。」と。

彼女の生きざまの一端を見る思いがした。私は何もわかっていなかった。(Y.A)



平成25年度上半期のパリアンでの学生実習の実績

平成25年上半期、パリアンでは多くの学生が実習をしました。患者さん宅を訪問させていただき、実習にご協力いただきました。学生のレポートの一部を掲載し、学生が多くを感じ学ばせていただいたことのお礼にかえさせていただきたいと思います。

◇大学・大学院実習

- 4月 東京医科歯科大学大学院 2か月 がん看護CNSコース学生1名
- 5月 有明医療大学看護学部4年生 2週間で3回 合計14人の学生が実習
- 6月 聖路加看護大学4年生総合実習(ターミナルケア) 3週間 3名
聖路加看護大学緩和ケアゼミナール演習 半日 5名
- 7月 東京大学医学部5年生公衆衛生学実習 1週間 4名
- 8月 帝京大学医学部5年生公衆衛生学実習 1週間 4名
- 9月 聖路加看護大学大学院 1か月 がん看護CNSコース学生 1名
東京大学大学院 2日間 地域看護博士前期課程学生1名

◇研修医

- 5月・8月 帝京大学医学部附属病院研修医 一ヶ月 各1名

パリアンの訪問看護に同行して感じたこと

聖路加看護大学緩和ケアゼミナール4年生のレポートより

私は今までターミナル期の人と接した経験がない。ターミナルの患者さんのいる家は、きっと終始重苦しい雰囲気が漂うのだろうと思っていた。今回訪問した患者さんの家は特別明るくも暗くもなく、日常の空気がした。死と向き合っているといっても、非日常の雰囲気はなく、いつもの生活の続きだと思わせられた。訪問中の会話では、生き死には関係ない話も、関係ある話も沢山聞いた。死の話や冗談の中に交えることもあって、その時、笑って良いのかどうか。真顔になるのも憚られるとひやひやした。訪問中の会話の中で思ったのは、家族の医療者も患者さんと一緒に事実を受けとめることが大事だということだった。

私が死の話題を避けたいのは、たぶん自分がまだ死とは無縁だと思っているからだと思う。もちろんいつかは死ぬと分かっているけどまだ死を直視しないでいられる。「私もそうですよと同じ立場で語れない」「まだ生きている自分を患者さんは苦々しく思うのではないか」と逃げたい。しかし死ぬことは話題を避けても変えられない事柄である。患者さんの家族がそうしているように一緒に受け止めることが必要だと思った。私には、未だこれに関しての具体的な答えが見つからない。しかしターミナル期の人と自分に線を引いてもその人の看護はできないと今回の訪問で思った。

私はずっと独居の末期がん患者さんがどうやって家で過ごせるのか疑問に思っていた。パリアンが独居の在宅ホスピスケアを実現させているのは本当にすごいと思った。しかも独居をどうやったらケアできるかというレベルに留まらず、カンファレンスで見せていただいたように、スタッフの患者さんのQOLに深く関わる姿勢に驚いた。医療職が実際に患者さんについてこんなに深く話し合うところを初めて見た。ここまで関わるができるのは在宅だからなのだろうか。病院でもできるのだろうか。独居の在宅ホスピスケアはサービスを充実させるだけではなくスタッフの熱意で実現すると教えられたような気がする。カンファレンスを見学してようやく在宅ホスピスケアが具体的にいくらか理解できた。

(抜粋、一部改編；川越博美)

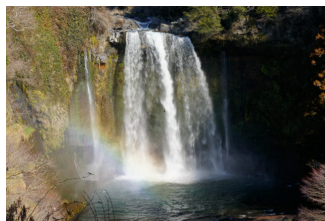
ラジオ日経「日曜患者学校～川越厚のがんからの出発～」より

ゲストに俳優の山本學さんをお迎えしての3回シリーズ

第1回(7月14日)放送分より

日本を代表する俳優の山本學さんをお迎えしてのインタビューの3回シリーズの1回目。山本學さんと川越厚先生とは、山本さんのお母様と奥様の診療から看取りまで関わったというつながりがある。

まず、役者として人が生きること、病になること、死ぬことについて尋ねた。1964年にテレビドラマ化された「愛と死を見つめて」では、山本さんは「みこ」の恋人役の「まこ」で出演された。当時あまり話題になっていない“がん”の話や“死”を取り上げることに反対する風潮があったが、生きようという意思をもって病と闘うというよりも、最後まで懸命に生きるということだけを考えた健気さに心を打たれて、どうしても出演したかったという。番組の最後の方で「まこ」が電話で「みこ」にギターを弾いて聞かせる場面では、録音で流す予定が、「本人に弾いてもらわない」ということになり、爪から血がでるまで練習したという裏話が聞けた。



また、1978年に放映された「白い巨塔」では、主人公の外科医・財前医師の同級生である内科医・里見医師役で出演した。教授選の後、里見は財前の末期胃がんを発見するが、今だったら末期であることを告知するところだが、医者である本人にも告げなかった。

山本さんは、医者演じながら、あるいは人の死を演じながら、「生きることも死ぬことも日常だと思う。死ぬということを特別に考える必要はないと思う。」とおっしゃっていた。

第2回(8月11日)・第3回(9月8日)放送分より

ご家族の病気や死について語っている。スキルズ胃がんで余命3か月と宣告されたお母様。在宅介護を決断する。当時、末期がん患者を在宅で看るということは極めて稀であった。山本さんは「病院にいたらできない、家庭で死なせるということは、生きてきた形をそのままに死に向かわせることではないか」という。

お母様の最期の診察を厚先生が診ることになった。きっかけは、山本學さんの奥様の知子さん(旧姓 秦(ハタ)さん)が、厚先生が中学・高校時代にオルガンを学んだ先生であり、“秦先生、厚ちゃん”の親密な間柄であったことからである。

その後、最愛の妻の知さんが肺がんになり、手術を受けて8年間は病気のことを忘れるくらい落ちていたものの、再発して自宅で亡くなられるまでの役者人生と、その後の悲嘆の苦しみについてお話されている。

患者本人が闘っている時は一緒に闘い、本人の意思のとおり動けるように生活を切り替えてきた。介護もできるかぎり自分でやった。発病からの約10年間は、役者半分・看護人半分だったと山本さんは述懐する。



厚先生は平成19年6月頃から奥様への訪問診療を始める。吐き気、息苦しさが出て、誤飲するようになってきた。10月4日にお亡くなりになった。最愛の伴侶を失った喪失感、悲嘆の苦しみは、葬式などで気が張っていた時期のあとに訪れた。「うつ病にはなるし、身体を動かしていなければ、俺は死ぬ。」と思ったそうだ。

残された家族が落ち込まれたときのケアをどうするか。「ある意味で非常に大きな課題となっている。病的になった時は医療従事者が手をさしのべる必要がある」と厚先生はいう。

山本さんが「人の生き死を考えることについて、情感の部分だけで人間の生き様を見過ぎている。もっと生理学的に客観的に理性的に対処しなければいけない。」と言っていた言葉が印象的であった。

「ボランティアの集い」25年度第3回開催は10月19日

伝言板



平成25年度第3回ボランティアの集いが10月19日午前10時30分から、パリアン4F打合せコーナーで行います。

今回の特集は、墨田区主催でNPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこもが企画・運営して5・6月に行われた「聞き書き」の実習を行う予定です。講師はおりませんが、「聞き書き」を習得して、語り手となるがん患者さんのこころのケアを深める一助にしてみませんか。

パリアンが関連する学会及び学習会等のお知らせ

・川越厚先生 出演 ラジオ日経「日曜患者学校～川越厚のがんからの出発」

毎月第2日曜日 21時～21時30分(次回は10月13日)

・放送の聴き方：短波放送・ラジオNIKKEI 第1：3.925MHz、6.055MHz、9.595MHz

放送終了後は、ラジオ日経のホームページ(<http://www.radionikkei.jp/inochi/>)でいつでも聴くことができます。

・アジア・パシフィック・ホスピス・カンファレンス 10月10日(木)～13日(日) バンコク

・日本死の臨床研究会年次大会 11月2日(土)～3日(日) 島根県松江市

10月のデス・カンファレンス、事例検討会の開催予定

デスカンファレンス：10月25日(金) 17時～18時

事例検討会：10月18日(金) 17時～18時



墨田区主催「在宅緩和ケア研修会～現場のつぶやきから学ぶ～」に参加して

NPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこもが企画・運営する、在宅緩和ケア研修会「在宅緩和ケア現場のつぶやきから学ぶ」が9月7日(土)、ケアマネジャー、ヘルパー、地域包括支援センターの相談員など在宅緩和ケアの現場で活躍している約40名が集合して墨田区役所131会議室で行われた。

研修会はNPO法人あこもの川越博美代表の講演に引き続き、出席者を4チームに分け、現場で起きている問題点を出し合い、その解決策を報告した。ちなみに私が参加したチームの方々は、介護職と医療職の連携が重要だとし、テーマを「他業種間のチームアプローチへの課題」として意見を出し合った。在宅緩和ケアのケアマネジメントは看護師が中心に動き、情報の共有化を図るためどうしたらよいかを検討した。(IE)

10月のボランティア活動予定

・ボランティアの集い：10月19日(土) 午前10時30分～12時

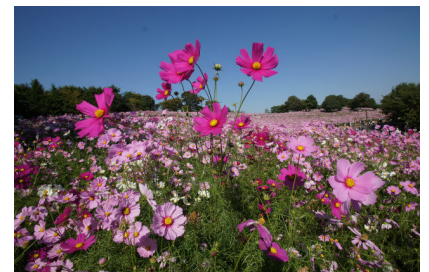
・訪問ボランティア：10月19日(土) 午後1時～

・デイホスピスボランティア：10月4日、11日、18日、25日

・命日カードボランティア：10月17日(木) 午前10時～

・手作りボランティア：10月29日(火) 午後1時～3時

・事務ボランティア：10月19日(土) 午後1時～



編集後記

◆毎年1年前に亡くなられた遺族をお招きして、思い出話や近況をお聞きする「メモリアル集い」は、参加された遺族には大変好評である。◆会場の広さの関係で1回5家族程度に限られることから、人数の調整にはパリアンの事務の方が大変苦勞するという。該当の方に招待状を出す。出席者が少なければ追加の手紙を出し、多ければ次回に回っていただく手紙を出す。今回は出席希望者が多くて数家族の方が次回に回っていただいたとか。「出席者が確定」と思ったら当日欠席の連絡。◆でも、この会に出席された遺族が帰られるときの晴々として顔をみたり感謝の手紙が届くと、事務方の苦勞は報われる思いがする。